

8月27日 みんなの・みらいが・みえる みディング



日差しが強い真夏日の中、与謝野町に住んでいる人、与謝野町と縁のある人、与謝野町に想いを寄せる人、そんな皆さんが、いろんな地域のいろんな世代、いろんな立場でちゃまぜに寄り集まった8月27日(日)。会場の野田川わくばるで、まちの未来を創造する集い「みんなのみらいがみえるみーティング」を開催しました。

ミーティング開催にあたり、山添町長から「どんなまちを創りたいかという強い思い、願いこそが未来を変えていくことができる。その思いを共有し、永く未来の与謝野町に生きていくことを切に願ひ、意義深い時間を創ってほしい」というあいさつにより、参加者による与謝野町の未来を展望する熱いミーティングが始まりました。

第1部は「小さくはじめる」から始まるまちづくりをテーマにした講演を、第2部は参加者全員でまちのみらいを創造するワークショップを、そして、住民サポーターの皆さんからの声掛けによりタイムカプセルをつくり、2040年の成人の日に再会することを約束してフィナーレを迎えました。

2040年、まちはどうなっている？どんなまちにしたいの？一人ひとりができることは何だろう？まちの未来を創造するために集まっていた皆さんと一緒に、テーマを6つに分け、これからの厳しい社会の波に翻弄されない野町らしい持続可能なまちづくりをめざす、一歩を踏み出す一日となりました。

THE YOSANO FUTURE PRESS

与謝野 みらい 新聞

第七号

与謝野みらい新聞
2017年10月10日発行
発行所・与謝野町役場
編集・企画財政課
総合計画策定委員会
ワーキングチーム

- 1 みみみみーティング
- 2 みみみみーティング第1部
- 3 みみみみーティング第2部
- 4 あっちこっちみらい会議
4コマ漫画



●9月22日(金) 与謝野の教育・文化・スポーツのみらい

地域の歴史、文化について知らない、教えられていないことからその価値が分からないといった課題に対して、「世代間交流地域交流を通して学ぶ」「教育を通じて文化を伝えていく」ことの重要性が出ました。町の歴史や景観を体操で表現した与謝野町まわり体操の普及をはじめ、「誰もが楽しめるスポーツがあるまち」「文化で攻める。地元文化を再発見・発信するまち」そして「親から子へ、与謝野愛(よさのeye)を持ち子どもを楽しく育てるまち」など、与謝野町ならではの未来像のフレーズが出てきました。



テーマ別編



●9月25日(月) 与謝野の自然・生活環境のみらい

豊かな自然との共存共生する関わり方が、これからの未来にとっても重要であるという視点から安心安全を第一に「災害に強いしなやかなまち」「自然の魅力もって磨いて活かしていくまち」「山を手入れし、もっと美味しい水が飲めるまち」などの未来像が出てきました。また、2040年という近未来の技術進歩を見据えた上での「生活環境の快適さとはどういったものなのか?」「生き生きと過ごせるまちとは?」など、住みやすさと情報共有の関係について幅広い視点からの意見が出ました。コミュニティの情報発信・共有から、誰もが活動しやすいための体制づくりが、「協力・連携・交流」の好循環を生むとして未来へ期待されることとなりました。

あっちこっちみらい会議

9月に入り、与謝野町商工会青年部の皆さん、宮津青年会議所の皆さん、そして与謝野町商工会青年部OB会の皆さん、京都中小企業家同友会丹後支部の皆さんから、2040年のまちの未来を創造するワークショップ・アンケートを実施し、人口減少・少子高齢化社会の中、広域視点・企業家視点からたくさんのまちの未来像やご意見をお聞かせいただきました。

「個性が活かした新しいことを受け入れるまち」「伝統を守りながらチャレンジし前進していくまち」「近所の顔が見えるまち」「交流人口・関係人口が増えるまち」など、わが町に自信と誇りを持つこと、あらゆることが集まり受け入れられる環境をつくることから、ヒトやモノ、カネの流れが生まれる未来の姿が描かれました。

9月1日(金)

与謝野町商工会青年部



9月4日(月)

宮津青年会議所



9月12日(火)

与謝野町商工会青年部OB会



総合計画4コマ
漫画
episode.5
みらい
まちの
まぢこ





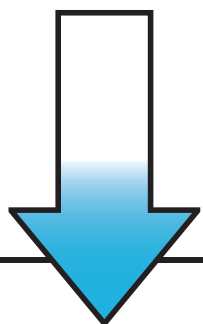
第2部

テーマをわけて未来を話しあう

みんなのみらいがみえるミーティング第2部のワークショップでは、これまでに皆さんからいただいた未来像や魅力、課題などのご意見や想い、キーワードなどから6つのテーマにわけ「まちの未来」をより深く語り合っていました。

■6つのテーマによる「まちの未来」のキーワード

- 産業・雇用
かっこいい農業、織物などの基幹産業の強化
- 移住定住・観光
インバウンド、シビックプライド、古民家リノベーション
- 健康・福祉
病気にならない、おせっかいコミュニティ、ご近所付き合い(近助)
- 結婚・出産・子育て
ワークライフバランス、地域のおせっかいおばちゃん
- 教育・文化・スポーツ
本物に触れる、郷土愛の醸成、地域教育
- 自然・生活環境
清掃作業、ルールづくり、豊かな生態系、自然体験



テーマ別編

8月27日に対話していただいた6つのテーマ「①産業・雇用」「②移住定住・観光」「③健康・福祉」「④結婚・出産・子育て」「⑤教育・文化・スポーツ」「⑥自然・生活環境」について、さらに対話を深めていくため、「みんなのみらいがみえるミーティング(テーマ別編)」として、9月11日(月)から25日(月)までの間に全6回シリーズで開催し、さらなる未来像の創造と魅力・課題について話し合いました。

●9月11日(月) 与謝野の産業・雇用のみらい

2040年の与謝野町はどうなる? 与謝野町を持続するためにできることを視点に「農業や観光は重要である」「今ある仕事に“楽しさ”がある」「やりがい生きがいこそが産業を醸成する」などの意見があり、「誇りや自信をもって魅力を伝えるまち」「学びと実践で人が人を呼ぶまち」などの未来像が出てきました。

●9月13日(水) 与謝野の移住定住・観光のみらい

人を呼び込む、人が集まるにはどうしたらいいかという視点から、つながりづくり・出会いを育むマッチング、受け入れる土壌づくりとして「溢れる魅力を活かし、町内町外交流を生むまち」「ヨソモノを受け入れるオープンなまち」「食の魅力の体験・体感ができるまち」「ヨソモノからヨサ(与謝)モノになれる場があるまち」「コアでニッチなまちの魅力を発信するまち」など、みんなで関わり作り作る“人の輪”という未来に向けた想いが出てきました。

●9月15日(金) 与謝野の健康・福祉のみらい

福祉が充実している町のイメージはあるものの、悩みを抱えている人や家族、SOSを出すのが難しい人がいることから「世代を超えた人と人とのつながりがあるまち」「シェアハウスで安心して生活できるまち」などの未来像が出てきました。自助・共助・公助+互助のまちとして、笑顔を結ぶ人とのつながり、平均寿命と健康寿命の差を縮めよう! 若い時から健康貯金といった、「人とのつながり」「支援体制」がキーワードとなりました。



●9月20日(水) 与謝野の結婚・出産・子育てのみらい

地域から孤立していることにより、身近に相談できる人がいないといった結婚や出産、子育てに対して感じている不安を解消するために「地域のお節介さんを育て、つながるまち」「地域で子育て、与謝野のみんなが子守さん」「地域の三世代でコミュニケーションをとるまち」「多世代コミュニティで新しいものをうむまち」「出会いから子育てまでの切れ目ない支援のあるまち」などの未来像が出てきました。(4面にづく)

■小さくはじめるまちづくり

京都には何かと縁があり今年3回目になります。6万7千人の塩尻市ですが、全国にある1718の自治体(市は791)のうち、人口でいくと上から398番目です。先ほども塩尻市と伝えたら「愛知県ですよね?」と言われ、「長野県なんですよ」と言ったところで。名前はどこかで聞いたことがあるけど、行ったことがない。実はそういう5万人~10万人規模の市の働き方、これからの教育やシニアの新しい生き方。これらの地域づくりに係わることは、私が住む塩尻市だけが凄く困っていることではないんです。地域の大小はありますが、地方公務員が「いない」「自治体ってというのは全国どこにもないんです」。

地域活性化伝道師

8月27日(日) 「小さくはじめる」から始まるまちづくり
—山田崇氏 講演より—
編集:企画財政課



PROFILE
やまだ たかし
山田 崇 氏
・塩尻市役所職員
・空き家プロジェクト nanoda 代表
・内閣府 地域活性化伝道師

第1部

私は、市役所職員の立場として、また住民として、5年前に仲間を集めて商店街に一軒の空き家を借りました。それが nanoda です。130軒ある商店街の中で約23%が空き店舗や空き家でした。長野県における空き家・空き店舗の平均が8.5%なので約3倍です。1週間は168時間で、週40時間は公務員です。残りの128時間は一市民です。その市民の時間で「何ができるのか」ということで5年前にやり始めたことが今、仕事になっています。

■三つのことから「ミチカラ」を

本日は、二つのお話をしたいと思います。
MICHIKARA は、多様な人たちがこうありたいと目指す一歩、その一歩であるこの道から、新しい未来や地域が生まれるという、官民協働の取り組みです。ローマ法王に米を食べさせたスパー公務員として有名な高野誠鮮さんが講演の中で言われたことに「限界集落のために会議をする。会議の報告書を作る。だけれども変わらぬ」ということがありました。これは、対話はすごく大切ですが、対話だけでは地域には目に見えた変化は起きないよということです。

これからの地域づくりには「何かを変える」という大きなことではなく、小さな一歩として会の終わりに「昨日とは違う、やってみよう」ということを参加された方が思うように仕立て「行政・地域・民間」の協働として考えていくことが重要になります。

■空き家プロジェクト「○○なのだ」

二つ目に「nanoda」では、「○○なのだ」と題した企画をいろいろと行っています。そこでは「使用目的を制限しない」「普段はできないけどやりたい」「ちょっとと」「やってみせる」といった、地域のことを「みんなと一緒に楽しむ」という精神に溢れています。地方創生成功の仮説に、若者にどれだけ「挑戦の場」を提示できるかがあります。これは先人の知恵や地域と繋

がりがある先輩を、いかに「若者を応援する大人」として増やすことができるかにかかっています。何も挑戦していない人は「よくわからない」「やめとけ」というかもしれない。それでも挑戦し失敗した若者がいたら「いいじゃんか」といえる大人や地域であることが大切です。誰かと一緒に何かやってみる。一人では陣は組めないが、三人いれば陣が組めるんです。先にも言いましたが、私は空き家を借りています。ただ市役所の職員が空き家を借りたら商売あがったりと言われるような形ではダメですよ。そこで私は商店街にないものを生むために、商店街の精肉店とパン屋さんにコラボレーションしてもらい、誰もお店をしていない時間に「カツサンド」を売ることをはじめました。これが思いのほか好評で、それまで以上に「人の繋がり」を作るきっかけになりました。ここで言いたいのは「小さなプロトタイプ」を作ること。住んでいる人が、まず先に「いいね」と言うようなこととでなければダメということです。カツサンド事業をやったわかったのは、大がかりな事業でなくても、自ら現場に入り目の前の問題を一つひとつ解決していくことの大事さを改めて実感したことです。

空き家そのものについても、当事者がどう思っているのかを聞いてみる必要があります。何か策を作る前に困っている空き家オーナーさんに寄り添う心がないと意味ある策は作れないはず。空き家問題は「地域への愛着醸成」や「シビックプライド」にも繋がることです。私は、所有者が物件を寝かせ、ただ税金を払うなら、掃除を有効に使ってもらえたほうが良いという想いを聞き、家賃を固定資産税分として双方がWINWINな関係になるような契約をしています。「まち」を変えるのは難しいけれど、自分の範囲で出来ることを「まずやってみる」。地方公務員のない自治体はないんです。公務員であっても住民であってもそれが結果的に将来の地域に結びつき、これから必要になる仕事に繋がっていくはずなんです。